最優秀賞

川と共に生きる

茨城大学教育学部附属中学校
二年　中島千智

私の住む水戸市は『水の都』と呼ばれている。市内には那珂川や桜川などの川が流れ、千波湖や大塚池といった湖や池もあり、水に恵まれた自然豊かな土地だ。また、川は人や物を運ぶ役割を果たし、地域の暮らしや産業を発展させてきた歴史もある。私の家も那珂川のすぐそばにあり、水はとても身近な存在だ。那珂川の流れは雄大で、眺めていると時間がゆっくりと流れていくように感じる。また、四季を通して、様々な鳥や植物を観察することができ、秋には、鮭が遡上する様子を見ることもできる。私は川の近くでの穏やかな暮らしがとても気に入っている。

しかし、そんな私の川に対する印象を一変させる出来事が起こった。令和元年十月に発生した台風十九号だ。当時、私は小学二年生だった。雨はだんだん激しくなり、那珂川の水位も徐々に上昇していった。夜になり、両親に「大丈夫だよ」と言われて布団に入ったが、不安でなかなか寝つくことができなかった。明け方、両親に起こされると、「那珂川が氾濫しています。避難してください」という警報が鳴り響いていた。私達も、すぐに親戚の家に避難することにした。その後、那珂川の水位は徐々に下がり始め、私達は無事に自宅に戻ることができた。しかし、市内では複数の場所で氾濫が起こり、家屋や道路の浸水など、多くの被害が発生した。近くの橋へ川の様子を見に行くと、いつも見ていた綺麗な川の水は茶色い濁流と化し、大量の木々やドラム缶などが流れていた。これまでの穏やかな川の様子とは大きく異なり、驚いて怖かったことを今でも覚えている。

それから、那珂川では大規模な治水工事が始まった。河道の樹木の伐採や土砂の掘削により川幅が広げられ、掘削した土砂を利用して堤防整備が進めら

れた。これにより、大雨で川が増水したときの水位の上昇を抑え、氾濫のリスクを軽減できるようになった。整備された堤防では、散歩やサイクリングを楽しむ人や、河川敷でサッカーをする人々の姿も見られ、那珂川は災害前の日常を取り戻したように感じる。しかし、全国各地で豪雨災害のニュースは後を絶たず、私は台風十九号での経験を忘れることは決してなかった。

中学生になった私は、探求の授業で水害と洪水対策について調べることにした。調べてみると、日本の大雨の発生頻度は四十年前と比較して二倍程度に増加しており、地球温暖化が原因の一つであることが分かった。また、洪水対策として、増水した川の水を地下の貯水施設に溜め他の川へ放出する『首都圏外郭放水路』や、大洪水でも決壊しないよう堤防の高さの約三十倍もの幅を持たせた『高規格堤防』が建設されていることを知った。これらは都市部で洪水の被害を防ぎ、人々の命を守るために活用されているが、完成までに莫大な費用と時間がかかるため、全国に普及することは難しいと感じた。

その他の対策として、雨水を農地や森林などの地中に浸透、貯留させ、ゆっくりと河川に流れ込ませる『グリーンインフラ』がある。私達の身近にある公園や校庭などもグリーンインフラとして活用することができる。洪水被害を軽減しながら、都市の緑化、環境保全にもつながる取り組みであり、行政、住民、企業が連携して進めていく必要があると感じた。また、豪雨の発生原因となる地球温暖化を抑制するために、エコバッグの使用や節電など私達にできることを続けていくことも重要だと考える。

今日も那珂川は悠々と流れている。これからも川と共に暮らしていくために、そして、この景観がいつまでも続くように、私は今できることを考え行動していきたいと思う。